

写真画像の将来

コニカ株式会社 取締役 内田 康男

写真はその発明以来、150年以上の歴史の中でさまざまな変遷を経てきた。

人と写真とのかかわりという点から見てみよう。

写真は当初、特定の写真士が特定の人々を撮るものであったが、50年ほど前から、誰もが撮る・撮られるどちらの立場にも立てるようになった。

次に技術の点から見てみよう。

カメラは木型カメラから始まり、35ミリカメラ、自動化、電子化等を経て、現在にいたっている。フィルムも乾板から技術革新を経て今のカラーフィルムにいたっている。

これらの変化を振り返ってみると、そろそろ第3の波ともいうべき次の変化が起こる時期にきているように思われる。そのきざしは2つの面から見受けられる。

第1にカメラのユーザー層の変化である。カメラユーザーは上から、プロフェッショナル、写真を趣味とするユーザー、日常生活で使用するユーザーというピラミッド型階層構造になっている。これが使い捨てカメラの普及等により日常生活で使用するユーザーが増加し、上の階層を侵食している。使い捨てカメラの多目的化、高画質化、超小型化は一層その傾向を助長し、通常のカメラの衰退を招いている。また、ミニラボが一種の事務機器として扱われるほどに普及し、非銀塩プリント（熱転写プリント）も普及するなど、写真の分散処理化が進んでいる。これらは写真にとって利便性が大きなポイントになっていることを示している。

なお、調査によれば使い捨てカメラが普及した理由として、

(1)フィルムがすでに入っている、(2)落としても壊れない、(3)盗まれない

ことが挙げられている。

第2は電子画像の動向である。8ミリカメラはビデオカメラの出現により今や皆無に等しい。これは電子画像が写真画像にとって代わった例といえる。静止画でも電子スチルカメラが開発されたが、当初予測と異なり、それほど普及していない。その理由としてまず使い捨てカメラ、ミニラボが普及し、写真画像の利便性が徹底したことがある。次に画質の問題がある。たとえばビデオカメラの画素数は動画には十分だがプリントするには不十分

である。電子画像を写真画像と同程度の画質にするには白黒でも100万～200万画素は必要と考えられ、その差は大きい。さらにTVに静止画を写すことが一般化するかということがある。高画質フォトCD方式が、画質が写真と同程度にもかかわらず普及しないのはこのためと考えられる。

しかし、今や電子的信号による良質画像のサーマルプリントが可能になり、米国ではFAX、電話等をなくしてPCですべての機能を果たせるよう、コンピュータの映像の双方通信が普及しつつある。電子画像が写真と競合、あるいは置き換わろうとしている観はぬぐえない。

以上を念頭に置いてこれからの写真を考えてみよう。写真画像は画質等の優位性を保ちつつ残っていくだろう。他方、電子画像は加工のしやすさやパソコン通信での伝送の簡便さという強みを発揮していく。今後、記録することの本質、「撮りたいときに撮り、見たいときに見る」ことが迫られる中で銀塩フィルムと電子技術は融合し、見たいときに見たい状態で画像を見れるようになるだろう。人と写真とのかかわり方も、ユーザーはこれまでの「撮る」までの参加から一歩進んだ「処理」するまでの参加をするようになるのではないか。

Q：電子スチルカメラが普及しないのは、安くてよいプリンタがないからではないのか。

A：現状ではないが、間もなく普及するだろう。コスト、扱いやすさから考えると、サーマルヘッドがホームプリンタとして普及すると思う。

Q：光沢といった画質はプリンタで出せるのか。

A：質感 (texture) の点で紙プリントは銀塩フィルムにまだかなわない。しかしCRTは、かなり追いついている。

Q：使い捨てカメラの他国での普及状況はどうか。

A：欧州はまだマーケットはない。米国ではかつて割高と考えられていたが、ようやくその価値が認められマーケットができてきた。

(トーマツコンサルティング 三宅 充祝 記)

【今後の予定】

7月14日(木) コメの将来展望

日本経済新聞社編集委員 金子 弘道

9月21日(水) 21世紀の地図情報

㈱ゼンリン システム開発本部長 江河 博巳